

策を中心にまちづくりを進めている山形県金山町を対象とし、景観認識に関わる調査を実施した。金山町が制定した景観条例によると、町内を中心地である景観形成区域と、その周辺部の景観形成区域外とに分けている。調査方法として、町内をまちづくりへの取り組みや周辺環境に違いが見られる4区域（景観形成区域を含むのはその中の1区域）に分類し、住民の町内全般にわたる景観認識や景観政策の柱である金山式住宅について、ヒアリング調査を行った。その結果、全4区域において、景観形成区域外の指摘が景観形成区域を上回っており、金山町住民の景観認識は、景観形成区域外の風景や場所のほうが高いことが分かった。

P-11

自然公園の利用計画から見た乗鞍山麓五色ヶ原の利用システムについて

川口 香（東京農業大学） 下嶋 聖（東京農業大学） 麻生 恵（東京農業大学）

自然公園は自然の保護と利用の促進を目的としている。しかし、過剰利用による自然への負荷や自然体験の質の低下が問題となっており、様々な場所で適正な利用について検討がなされている。海外の自然公園等で多く実施されているガイド付きのツアーや案内を行う形式が近年、注目されている。岐阜県・高山市に位置する乗鞍山麓五色ヶ原では、地域の自然を保護し、適正な利用を図ることを目的として、2004年より入場者に対して独自のルールを決め、それに基づく利用を提供している。内容は、入場制限、ガイドの同行、入場料の徴収、ガイドブック配布等である。本研究では、五色ヶ原独自利用システムの事例を紹介するとともに、ガイド（森の案内人）を対象とし、案内を行う際の適正なグループの人数や利用システムに関する案内人の意識調査を行い、結果報告を行う。今後、他の自然公園等で、利用について計画や管理・運営を検討する際の一資料となることを目的とする。